
魔法先生ネギま!~最強の魔術師~

スバル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま!~最強の魔術師~

【Nコード】

N3103Q

【作者名】

スバル

【あらすじ】

俺は桜峰暁、魔術師だ。はあ!?!俺が教師!?!英雄の息子の補佐!?!...任務放棄したい...

プロローグ

「我は放つ」

夜の森の中、黒髪黒目で全身黒ずくめの青年が佇んでいる。前方には大量の鬼が待ち構えている。

「光の白刃!!!」

刹那、彼の前に突き出した右手から純白の閃光が放たれ、鬼達を大爆発が襲った。衝撃に耐え切れずに次々と塵となり消え去っていく。

「…任務完了……さて、帰るか……我は踊る天の楼閣」

彼が呪文を呟くと、一瞬にして彼は姿を消し、残されたのは彼が作り出した戦闘の傷跡だけだった。

「報告：侵入した鬼約150体の殲滅、完了しました」

ここは麻帆良学園の学園長室。先程戦闘を行っていた青年が淡々と報告をしていた。

「うむ、ごくろうじゃったのう桜峰君」

この老人はこの学園の長である近衛近右衛門。この学園の中でも強い魔法使いである。

特徴は、異常に長い後頭部だろう。桜峰と呼ばれた彼は今でもこの老人が妖怪の類であるであろうと信じている。『こんな人間がいたまるか』、というのが彼の言い分である。

「しかし、君は相変わらず仕事が早いもう。まだ連絡してから30分と経っておらんというのに…」

「兵は拙速を貴ぶ、戦闘は早く終わらせたほうが良いものです。では、これで失礼します」

素早く踵を返すと、彼は学園長室を出て行った。彼の出で行った扉を見つめながら学園長は懷から一枚の写真を取り出した。写真には3人の少年少女が写っている。

「婿殿、もう少し愛想の良い子に育てられなかったのかのお…」

学園長の呟きは誰にも届くことはなかった。

プロローグ（後書き）

処女作です。よろしくお願いします。

人物紹介

さくらみね あきら
桜峰 暁

15歳。容姿はオーフェンそっくり。オーフェンの子孫であり、4歳の頃、両親と共に京都に旅行に来た時、魔法使いとの戦闘に巻き込まれ、両親が他界。その後、近衛詠春に引き取られる。父の残した魔術書を読み解き、独学で魔術を習得した。このかと刹那とは仲が良く、本音をしゃべるのは彼女達の前だけ。容姿が優れているためよく好意をよせられるが、本人はあまり興味がない。学園長からの頼みは任務と割り切っており、口調が淡々としている。ちなみに学園長は最も信頼していない人物らしい。

第1話

桜峰暁の朝は早い。毎朝5時に起床し、軽い朝食を食べ、5時30分には待ち合わせ場所である女子寮の近くの林に向かう。

「おはようございます、アキさん」

「おはよう、刹那」

待ち合わせの場所に着くと、昔からの馴染みである桜咲刹那が待っていた。彼女とは毎朝一緒に鍛錬をしている仲だ。

「じゃあ、軽くストレッチしてから素振りをしよう。その後少し打ち合うか」

「はい、よろしくお願いします」

暁が言えた義理ではないが、刹那の態度は堅苦しい。親しい仲である暁に対しても敬語で接するし、このかに対しては恐れ多いということで話すことすらしない、ただ一礼するだけだ。このかも寂しがってるだろうに。

と言いつつ、暁はまだこのかと会ってすらない。理由は会うタイミングを逃したかららしい。

「じゃあ今日はここまでにしよう」

「ありがとうございました」

「ちゃんと勉強しろよ」

「うっ…」

刹那と別れた後は基本的には二度寝をするのが日課だが、この日はそういうわけにはいかなかった。学園長からの急な呼び出しが入ったからだ。若干不機嫌になりながらも渋々学園長室に向かう。

「…桜峰です」

ノックもせずドアを開けると、学園長とその右腕でもある高畑が待っていた。

「よく来てくれたのう桜峰君」

「挨拶は結構です。用件はなんでしょうか？」

「せっかちじゃのう、とりあえずこれを見てくれんかのう」

そう言うとかの資料を差し出してきた。不審に思いながらも資料を受け取り、目を通す。

ネギ・スプリングフィールド、10歳、英雄の息子、一通り資料に目を通してから高畑に返す。

「で、この少年がどうしたと言うのです？」

「うむ、この子は来月から女子中等部で教師をやることになったんじゃない」

……はあ！？10歳が？こんなガキが！？何故！？暁が色々
頭の中で問答していると、学園長は核爆弾落とした。

「それで君には彼の補佐をして欲しいのじゃ」

は？

第2話

私こと桜峰暁は、只今妖怪ぬらりひょんと対決中である。

「…お断りします。私の任務は近衛木乃香の護衛であり、子供のお守りではありません。さらに私は詠春さんの命でこちらに来ています。本来貴方の命を聞く義理はありませんが、情けで引き受けるんですよ?」

「しかし、お主は麻帆良にいる間はわしの保護下にある。保護下にある以上わしの命は引き受けるのが道理ではないかの?」

「別に頼んではいません。貴方の援助がなくても私は一人でやっていきます」

「しかしのう…」

このやりとりを続けて早30分、高畑は呆れてどこかに行ってしまったが、暁としてはここで妥協し、ぬらりひょんの頼みを引き受けるわけにはいかない。何故ならこの妖怪は使える人間は過労で倒れるまで使い倒すからだ。さらに英雄の子とかいうガキのためなら一般人を巻き込むことを厭わないだろうし、ガキのためならどんな汚い手段もとることは想像に難くない。

「とにかく私は引き受けませ…」

「学園長先生！！どーゆーことなんですか！？」

暁が拒絶の言を告げようとした瞬間、オレンジ色の髪をしたツインテールにした女子が暁を押しつけ、ぬらりひよんに食いかかった。

「まあまあアスナちゃんや、落ち着きなさい」

「これが落ち着いていられますか！？どういうことなんですか！？大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！？」

なんだかよくわからないが、ぬらりひよんのマークが暁から外れた。好機と思い離脱を試みる暁だが…

「…………アッキー？」

懐かしい声が、懐かしい暁のあだ名を呼ぶ。暁が振り返ると、そこには今にも泣き出しそうな顔をした暁の大切な人がいた。

「久しぶりだな、このか。綺麗になったな」

「アッキー久しぶりや~~~~~！！！！！！」

このかは暁に向かって走り出し、そのまま暁の胸に飛び込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3103q/>

魔法先生ネギま！最強の魔術師

2011年2月3日14時58分発行